

精神発達遅滞幼児の治療教育過程の研究

研究第8部 津守 真

共同研究者 加藤 洋・板野 昌儀(愛育養護学校)

I. 反復行為における自己治療過程

加藤 洋(愛育養護学校)

I. はじめに——本研究の問題点——

Gは愛育養護学校幼稚部に在籍し2年目である。身体つきはたくましく、5歳で体重は40kg以上である。生後2～3ヶ月ごろから肥満傾向をみせはじめ、肥満であるがゆえに常に自分の重みが身体的にも、また心理的にも圧迫してきていると考えられる。また、このようなGに注がれる目は無意識な圧力、圧迫となりさらにのしかかってきている。周囲にいる子どもたちは、Gが通るだけで避けたり、声に驚いたりする。一学期当初、Gは突然「イタイ、イタイ」といいたし、くずれ(そばにいた私には、原因がわからない)頭を地面や床に打ちつけ、泣き、近くにいる子ども(特にGより身体が小さく弱い子が比較的多く、またおとなに対しては目を中心に攻撃してくる)を手当たりしだいにたたいたり、つき倒したり、水をかけたりする。そして、この行為をしながら「ごめんね」とか「ごめんなさいして」というのは拍車がかかったように荒れつづける。G自身にとり、自分の爆発的な力に驚くばかりでコントロールができず、力にふりまわされているようである。このようなGに対して母親の対応は、Gへの恐怖感と、まわりへの遠慮から、Gを車に乗せ、走らせ、多量の菓子を与えてなだめる。しかし、あまり手に負えなくなるとたたくことがある。「こんな時ビシャーとやり、目をさませるのです」(母親の言葉)。父親の対応は力でおさえたり、混乱がおさまるまで一人にさせたりしている。

今回Gの保育臨床をとおり、Gの反復行為を考察し、G自ら爆発的な力をコントロールし、さらに身心の安定をはかりつつ、自己の存在を明らかにしながら、人への信頼を獲得していく過程を記す。

この保育体験から、子どもたちの繰り返し表わす「遊び」に意味があり、子どもたちなりの深く豊かな感覚(注1)と生きられた時間(注2)の流れにさからうことなく身をゆだね過していることに気づく時、悟の世界にも

にているであろう静けさ(注3)と内から外に向かう再生力、生命力の力強さに出会い感動する(注4)このことは子どもたち一般の反復行為や遊びにもいえる。例えば、公園などに行くと、親に背中を押してもらい、楽しげにブランコにのっている子どもをみかける。単調でスピードもさほどないばかりか、特別な揺れかたをしているわけでもないのに、子どもは同じ繰り返しの行為のなかであって、何時間も生き生きとした声や表情、そして身体全体をつかいよこびを表現している。

ここでの事例資料は、昭和55年4月から昭和56年3月までの1年間にわたる、Gが5歳から6歳に至る期間のものである。

II. 反復行為の考察

1. 気に入ったスピードに保つ

<4月13日: Gは初日からおんぶや肩車で、園庭を一定のスピードで走ることを要求する。ひとたびスピードが落ちると、背中や肩の上で身体を激しく上下に揺すり、足をバタバタさせ、「ヨーイドン、ドン」と語調を強めひししにもとのスピードに戻そうとする。どうもGの気に入ったスピードがあるようだ>

<4月23日: 「スピードやるの」といい、ハンモックに乗ることを要求する。ハンモックにGを乗せ左右に揺する。あまり揺らしすぎると、「止めるの、止めるの」と語調を強める。そと揺ると、「スピードやるの、やるの」と喉をつまらせたような声を強める。自分にとり気に入ったスピードになると要求が止まる。>

<5月1日: 隣接した公園で一人乗り用のブランコに乗りうしろを押させる。スピードがあがらないうちは「スピードやるの」といいつづける。スピードがすぎると「とめるの」といい自分の気に入ったスピードを保とうとする。>

Gが力の強弱をコントロールさせながら、自分の気に入ったスピードを保つことについて考えてみる。

Gの母親はGに対して自信がもてずにいる。しかし、安定したかわりを保とうと努力してきている。父親は身体のがっちりした背の高い人で、Gに対してかなりはっきりした教育方針をもって育ててきている。「何事もトライさせる。」(父親の言葉)という考え方でGをグイグイ引っぱっていく。そんな父親の考え方は少なからずGにとり無理があると考えられる。母親の力の弱いかかわりと父親の力の強いかかわりの間にたつ日々、力の強弱をコントロール(注5)しながら、自分の気に入ったスピードを保とうとする行為は、母親と父親のかかわりの安定を願う行為であると考えられる。そして、Gの行為は両親との関係にとどまらずGをとりまく人々にも及んでいるのではなからうか。すなわち、Gに対して、避けてとおる人、はれものにさわるような気持ちでかかわる人、またGを抑えつけようとする人等から無意識に伝わってしまう心理的な圧力をコントロールし調和をとり戻そうとする努力の表われだと思える。

2 身体の平衡を保つ

4月27日：隣接した公園にはだして行く、G自らの腰までくる川に私と入ることを要求する。一步一步力を入れて踏み込むが、川底の土に足をとられてGも私も思わず手をとり合って進まないし身体の平衡がくずれ、倒れてしまう。このような条件の所を何度も行ったり来たりして過す。これがひと段落すると、次に池の囲りをとりまく縁石の上を歩く。一步一步慎重に歩かないとすぐ平衡がくずれ、落ちてしまう。次は滝登りである。上からかなり強い勢いで落ちてくる水を身体に受けながら足場を確かめ慎重に登る。次はGが「おやま」といっている土手登りである。ここは雨が降るとおとなでも容易に登れない所である。そこを何度も足を滑らしてはどろどろになり登る。その姿はまるで何かにたち向っているかのようなようである。Gが選んで進むコースは、常に身体の平衡を保つことが要求される所である。

Gの身体の平衡を保つ行為を考えてみる

今までGをとり囲む人々から(親も含む)身体が大きいということだけで「たいへんね」「つらそうね」「強そうね」「こわそうね」等といわれ続けていることで、常に身構えてしまうような緊張があり、大変さだけが無意識に伝わり心理的な重さ(注6)になっていると考えられる。その重さにより、くずされた心の平衡をとり戻そうとする努力であると思える。<11月19日：突然「小さくしてちょうだい」といったことばが印象的である。>

3 同じコースを通る事と渦巻とトンネル

Gと私は公園で2~3時間過す。公園に行くとGが通るコースがほぼ定まってきた。(A)愛育養護学校→(B)川→

(C)縁石→(D)滝登り→ブランコのある所まで続く縁石の上を歩く→(E)一人乗り用のブランコに乗る→おんぶでおやまへ行く→(F)おやま登り→G笹やぶを自分が先に立ちかきわけ進む→笹やぶから出終るとすぐおんぶを要求する(おぶわれることで笹やぶの荒ら荒らしさから抜け出した緊張をほぐしているように思える)→手をつなぎ愛育養護学校にもどるこのコースは常に右回りである。<図1参照>

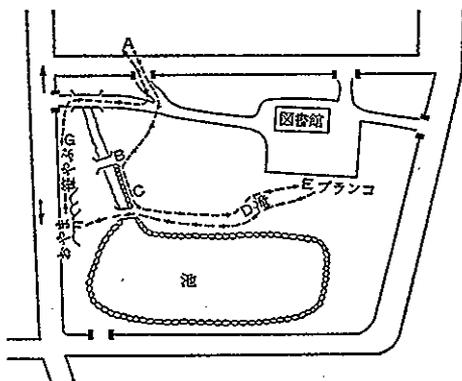


図1 公園でのGのコース

<11月7日：学校内で車椅子を使った遊びを一日何度かする。その一つにゆびさしをしながら「あっち」といっては常に自分で選んだコースを通ることを要求する。(A)校庭→(B)松沢ルーム→(C)ホールまでつづくわたり廊下→(D)ホールにおいてあるトランポリンを中心に一度回る一圏庭にもどる。この決めたコースを一度に5~6回通る。<図2参照>

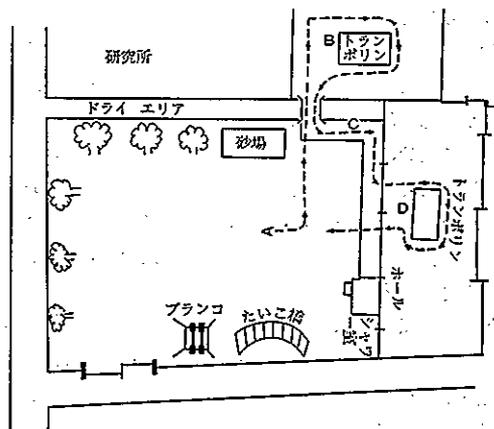


図2 車イスで回るGのコース

<7月16日：画用紙と鉛筆を与えると常に右回りの渦巻きを書く、そして渦巻の中心に向かって上から下へ線をかなりの筆圧で書く>

＜9月11日：右回りの渦巻を一枚書く＞

＜11月12日：地面の上に指で右回りの円を書き、その円の上を三回程度なぞる。そして円の中心に立ち三回足に力をいれて足ぶみをする＞

＜12月8日：2人きりで職員室に入り込み、ザラ紙の上を鉛筆で何枚も右回りの渦巻を書く。そして、その中心に向かって何度もスピードにのった線を強い筆圧で書きおろす。あまり強い筆圧のため、ザラ紙を一度に5～6枚通してしまうほどである＞

＜12月12日：地面の上に右回りの円を書き、中心を平手で2～3回たたく。同じことを3回繰り返す、書いた円を手で消す。次に校庭のすみに土を盛りかためた所があり、中心に穴があいている。その周りを右回りに「クルクル」といいながら何度も回る。視線は回っている間自分の足もとに注がれているが、ときおり足もとから視線をそらして穴の中央を見ながら回り続ける。そして突然止り、柵の向こうで5～6人の園児が楽しげに遊んでいる方を数秒ながめてまた右回りを続ける＞

Gの右回りの円や渦巻を考えてみる。

公園におけるGが選んだコースの一点一点を線でむすぶと右回りの円が描ける。また園内での車椅子を使ったコースも同じことがいえる。この円は毎日通ることにより右回りの渦巻が描ける。(注7) Gが渦巻を土や砂やザラ紙の上に書いたあと中心に向かって、(あるいは、渦巻をうち消すためのなにか?) 手でたたいたり、渦巻の中心に立って、力をいれて足踏みしたり、また鉛筆で書いた渦巻をうち消すようにしながら、中心に向かって筆圧の強い力で線を書く。Gにとっての円や渦巻は決して“調和や統一あるいは希望”といったイメージではなく、むしろ、分裂し混沌とした状態を示していると思われる。渦巻模様は時にグレート・マザー(ユング)を表わすといわれている。又円は“人間の運命や循環”の象徴であるともいわれる。メルベン「手のないむすめ」には、“自分の周りにチョークで円を描いて、悪人が近づけないようにした”とある(注8)。また、Gが円や渦巻を描いている時言うことばは、Gの心をのぞかせるものではなからうか。

＜12月8日：ざら紙に渦巻を描きながら、「自動車つくろうか、タクシーつくろうか、こうやっちゃだめよ」そして、次の瞬間「みみず、みみず」といい激しく線を描いた後、椅子から落ち、床に倒れ、頭を床にぶつけくずれる＞

＜2月12日：校庭の土の上に渦巻を書き「さあ、ここに立ちなさい、さい、さい」という＞

Gの「自動車つくろうか、タクシーつくろうか タクシーが来た」といい描く渦巻は、自動車のタイヤが走ってくるイメージにとることもできようが、Gにとり車のイメージは、Gが荒れた時やGになにかやらせる時(例頭の毛を洗う時、つめを切る時—Gにとり嫌いなことである)「ごほうび」と称して、父親や母親が車に乗せてGの気持をごまかすためのものが考えられる。さらに「みみず」はGが2～3歳のころ母親とGがゆったりとした気持で庭にいた時、蟻がみみずを運んでいたそうである、その時母親がはじめて、みみずをおしえたそうである。Gはときおりゆったりと愛育養護学校で過していると、突然「ありさんがみみずをはこんでいる」という。また、母親はみみずが好きだともいっていた。このことから、Gにとりみみずは母のイメージと結びついていると考えられる。Gは「タクシーつくろうか」といい渦巻を書く。「みみず」といってはげしく線を書き、渦巻をうち消すようにしながら紙を破くほどこすりつける。この行為は、父親や母親のGの気持を、すりかえ、ごまかす対応に対する抗議であり、またなんとか渦巻の混沌とした状態から抜けだそうとしているGの姿であると思える。

渦巻を描きはじめたとはほぼ同じころ、Gは突然トシネルの歌を小さな声でくちずさむようになっている。

＜11月19日：「小さくしてちょうだい」と突然いう。また、その日(10人のインディアン John Brown Has a Little Indian) のメロディーにのせ、トンネルという歌詞だけを当てはめ、オール・フレーズ歌った。このトンネルの歌は、Gが砂を手やスコップで掘りはじめると、ときおり歌うものである＞

＜1月11日：「トンネル」といって砂を手で掘りはじめる、掘ったところを数秒後うずめる＞

＜1月12日：砂の上に円を描く、そして手で消す、円は右回りである。次に「トンネル」といって砂を掘り出す。2～3センチ掘ると砂をかけるうずめる。砂をかき集めさらに山のように積む、スコップで「ペンペン」といいながらたたき固める、たたかれて平らになった砂の上に指を4本立て軽く押す。この行為を2度繰り返した後、足でその所を2～3回踏みつけ終わる。＜図3＞

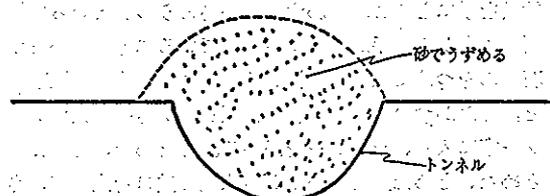


図3 Gの掘るトンネル

Gの掘るトンネルは地面の下に向かって掘るトンネルである。常に出口のないトンネルである。まさにGのやりどころのない今の心の表現であると思える、「トンネルや洞穴のある山は母親像と関連が多くある」(注9)といわれている。Gは母子関係において心理的な問題をかかえていることは明らかである。以前保育中、Gがシャワーを浴びていた時、母親が突然あらわれ、声をかけたたんGがひどく荒れだしたことがある。この経験は何度か違う場面でも起きた。しかし、Gの渦巻やトンネルは単に両親を否定するだけの意味ではなく、両親と真正面からの取り組みをして、関係を回復したいという願いからの叫びのように聞える、さらに、この行為の奥に自己の存在を明らかにしようとする努力があるのではなからうか。

4 洗い流す行為

<4月17日：Gが気に入っている足でこぎ黄色い自動車水を水を汲んできては、車にかけ手で洗うことを繰り返す>

<5月25日：公園の川の水で突然何度も顔を洗いはじめる、(この行為は数日つづく)>

<6月9日：食後Gは一人でセロテープの入っている所に行き、手にセロテープをグルグル巻きつけはじめ、一本のセロテープが終わりきるまでやる。そして「とるの」といって自分でほどきはじめ、固くついているところはそばにあったハサミを使って切る、どうしてもとれないところは私に手伝ってもらおう>

<11月26日：緑・赤・黄・黒の順に手に絵具をこすりつけたり、こねまわしたりする、そのあとしばらくして「シャワーで、手あらうの」といってシャワー室に行き私にすっかり絵具をおとしてもらう>

<1月12日：赤・青・黒・緑の絵具のビンのうち、緑の絵具を選んで手につけ、こねまわす、ひととおり手につけ終わると、「手あらうの」といって一人で洗面所に向かい石けんで、「せっけん、せっけん」といいながら洗う。もうすでに手のひらの絵具はおちているにもかかわらず何度も石けんをぬっては洗い流す。水道の蛇口を自分で止めて洗面所を飛び出して行く、そしてまた絵具のビンがおいてあるところへ行って、緑・赤・青の順に絵具を手にとりこねまわす。「手あらうの」といって洗面所に向かう。手がすでにぶやけているにもかかわらず石けんをつけては何度も洗い流す。この行為が終わると、「ぬがすの」といい私に洋服を抜がさせ1人でシャワー室に入り、シャワーを浴びる。「とめた、とめた、とめた、とめた」といいながら水道の蛇口を止めて、さっぱりした顔つきでとびでてくる。そして、「おようぶ

くぎるの」といって自分のロッカーがある部屋に走って行く。

Gの水で洗い流す行為について考えてみる。

(1) Gが黄色い自動車を洗ったことについて考えてみる。Gにとって車は特別な意味があると思われる。昨年度からある行為なのだが、Gが荒れると母親は学校まで乗ってきた車のカギをGにわたし、車に乗せてGが到着くまで走らせていた。Gも車に乗りしばらく走ると気持をおさめられるようであった。車は自分の感情をおさめる空間であり、また気持を立て直し安定をはかる空間でもあったようだ。しかし、車による安定は長つづきせずまたすぐずれてしまう。そういう意味ではGにとり自動車は心の支えではあったが、自分の感情をおさめるための一時しのぎの空間であり、また、自分の気持をごまかされる空間でもあったと思われる。この時の黄色い車がG自身に置き換えられるとしたならば、車を何度も洗うことにより、学校での新しい生活の始まりと、新しい先生(私)とからくる緊張感を柔らげようとした行為と、自分の気持をごまかされる。その言葉にしようのない心を洗い流していたと思われる。

(2) 顔を洗った行為を考えてみる。

顔とは常に社会に対して向かっている仮面と考えることができよう。顔は人間関係のなかでいろいろな感情をたくみに表わす自分の一部であり、また全体である。また顔はなにもまとうことなく社会に対して向かっているため、社会からの規制を真正面から受けることになる。従って、顔にはさまざまな感情がしみこんでいると思われる。Gの顔洗いや顔についている社会からの規制を落とそうとした行為であると思われる。

(3) Gの手にセロテープや絵具をつけそれを洗い流すことについて考えてみる。

Gの手に関する経験を考えた時、Gと初めて会ったころ、私が何気なくGの前で上げた手に対して、突然おびえたような目つきになり、身体をすくめ、手で自分の顔をおおいかくすことが何度かあった。家では、親に禁止され、たたかれる手、おとなに指示される手、Gが荒れた時、目をねらってたたく手等、このようにGにとり、手は人のあたたかさや、やさしさにつながるイメージとは、ほど遠かったのではなからうか。

次に、手は物を受けとるための手である、と同じに人の気持を受けとる手でもあるはずである。(注10) Gが何かを相手に差し出したとき、相手の都合が優先されたり、差し出されていることに気づかなかつたり、(あまりにも差し出しているというサインが弱い)、相手の受け取り方があまりにもいい加減であったり、また、

まったく無視されたりしたのではなからうか。このようなどき、Gはむなしさやあきらめの心で一ぱいだったはずである。さらに、相手の都合やGの気持とはまったくかけ離れているにもかかわらず、頭越しにおこられたり、禁止されたり、たたかれたりした経験を繰り返すことにより、いつしかGは相手の気持を受け取ることを止めたのではなからうか、4月5月のころを思うとき、Gはどんなに私が疲れようと、これでもか、これでもかといわんばかりに次から次へと要求を出してきて、私がどうしても疲れて要求に答えられなくなると、すぐ誰れかれかまわず相手を突き倒したり、水をかけたり、たたいたりしては、「イタイ、イタイ」と叫んで荒れていた。また、ゆらりと遊んでいる時、突然「イタイ、イタイ」といだし荒れはじめることが日に何度かあった。そして、Gがときおりいう言葉は禁止を表わすものであった。「ひろいなさい」「いい子じゃないよ」「ごめんね」「もうしない」「やめなさい」「おばあちゃんがおこるよ」等である。このようなGとの体験のなかで感じていたことは、「どうしてそんなに私を疑うのか」「私の手のどこがおびえるほどこわいのか」「どうして自分が疲れても、なほ要求をだしつづけなければならぬのか」であった。

このようなことから思うに、Gにとり、相手の手は自分を捕え禁止する、信頼できない手であり、また、自分の手は、何かを破壊してしまふ、受け入れにくい手だったのではなからうか。昨年度もあつた行為だが、肉にくい込み、手のいろが変ってしまうぐらい強く、「ビニールテープやセロテープを巻きつけたり、身体のどこでもなく手だけに、どろどろになつた絵具をつけ、こねまわしたりする行為がみられる。このテープや絵具を手につけるとは何なのだろう。テープや絵具は、自分の手をかくしてしまふものであり、まるで相手から何物も受けとらないようにしているかに思える。すなわち、「受けとらない」という気持がこめられているのではなからうか。しかし、この頃繰り返されている行為に、手に塗られた絵具を自分から、「手あらうの」といって洗面所に行き、石けんをつけては水で洗い流している。この行為はGの心の変化を促しているように思える。

一般的に人との関係において、「水に流す」とか「洗い流す」とかを使うとき、今までその人が持ち続けてきた(ときには心の支えにもなっている)概念をくずすことを決心し、新たな関係を築き上げようとするときである。今まで自分を支えてきてくれた概念(それが人に受け入れられるものであろうと、なからうと、そのことは別に)をくずすこと一つをとっても、大変なエネル

ギーと努力が要求されることは容易にわかることである。この時期の心身は不安定であるほうが、むしろ当たり前であろう。そして、そのような状態につけ加えて、新たな関係を築き上げようとするのであるから、エネルギーを一回一回使い果し、くたくたになっている状態ではなからうか。

5. せまい空間に入り込む

<6月2日：校庭にある鳥かごに私を透し入れる。鳥かごは子どもとおとながやっと入れる狭い空間である>

<6月11日：Gは部屋の隅にある、子どもが一人やっと入れるほどの空間に入りこむ。周りはロッカーと壁と戸で囲われていて、人に気づかれにくい所である>

<7月3日：ホールの壁ぎわにそって積木が積んである所に上がる。壁と積木の間にGがやっと入り込める空間を見つけて、身体をよじりながら入り込む。そして、積木が動くまで手で身体にピッタリするまで寄せる>

<7月9日：ロッカールームに入りこみ、私のロッカーを開けて中から手で戸を閉め、しばらく出てこない>

5. せまい空間に入りこむ行為を考へてみる

一般的に、せまい空間は、恐怖感にかられる場合と安定感をおぼえる場合があると思える。安定感をおぼえる場合、そこで自分の内的世界を眺めはじめることにもなる。たとえば、トイレなど、私にとりほかの人に邪魔される心配のない空間であるばかりでなく、緊張がほぐれ、さまざまなことを自由に思いめぐらすことができる楽しい空間である。また、子どものころを思うとき私たちは狭いところを好んで遊んでいたことを思い出す。家の中では、押入れの中や机の下に入り、かくれんぼをした。外では狭い壁つたいを選んで入り込んでみたり、土管のなかに入ったり、板をもってきてはクギでうちつけ、狭い家を作ったり、洞穴を掘ったり、たまたに母に連れられ町のデパートへ行くと、マネキン人形の足の下に潜ったり、衣服がつるしてある下をはいずって楽しんだりもした。この狭い空間は、私にとり、なによりの遊び場の一つであった。そしてそのなかで、さまざまな楽しい世界がひろがっていたのである。また、この空間は内的世界を楽しむだけでなく、物に触れることにより、自分の位置や形を確認することができた。

Gが狭い空間に入り込んだとき、心理的な安定感と自分の存在(位置や形をとおして)を確かめていたのではなからうか。

III. まとめ

Gとの保育臨床の体験を通して、Gのさまざまな反復行為が、ときには外から、ときには内から、自己の存在

を明確にするためになされていることに気づくことができたとき、Gの激しくまた力強い再生力、生命力に感動する。現在においてもGの反復行為は続いている。しかし、その行為のうち消えていったものもある。例えば、公園のコースがなくなったり、トンネル掘りがなくなっている。しかし、一方新たにつけ加わった行為もある。例えば、裏庭や校庭にあるスベリ台を大変慎重に滑り下りる。積木やピアノの上に登っては飛び下りる等である。

Gの変化として、突然「イタイ」といってまわりの子どもを手当りしだいに攻撃することがなくなった。その代り、他の子が突然やってきてGをたたいたり、Gの遊びを邪魔すると「もうしない」といい、自らその場から身をひくことがある。しかし、Gがどうしてもその場でやり続けたいことである場合は相手を突き倒すことがみられる。このように私以外のおとなにも、Gがなぜイライラしているかという原因がわかり易くなっている。一つの遊びが落ち着いてじっくり時間をかけてやり通せるようになってきている。それに伴って私と絡み合い横になって休むことができるようになってきている。Gは2学期の終りごろまでゆっくりと横になって休んだことがなく、たえず次から次へと要求をし、動き回っていた。回数はさほど多くないが、私からしばらく離れ、他の保育者のところへ行き自分が気に入った遊びをしてこれようになっている。(この行為は人への広がりや信頼を獲得してきていることに連なると思える。)、しかし、Gが向かってゆくおとなは男性が主である。Gは愛育養護学校の一年目から男性の保育者を選んでる。そして今年も私である。なぜGは男性を選ぶのであろうか。Gは自分の要求をガッチリ受けとめてくれる力強い男性を選び、体重の重さばかりでなく心理的な重荷を共に背おってくれる人を男性に求めたのであろう。

保育において、Gとの関係をますます深め、Gの内からの動きにより(inside out from himself)さらに他のおとなへの広がりや深まりを信じつつ、子どもの世界の探究を深め、自己の体験を見つめ直してゆきたいと思っている。

「どんな行為でも、子どもの行為に意味のない行為はない」(津守真)の言葉を味わいつつ、保育を楽しみつけたいと願っている。

引用文献

- 注1 ここていう「感覚」とは、津守 真「感じる」「感覚」「イメージ」の意味と同じ考えをとる。
津守 真「精神発達遅滞幼児の治療教育の研究 I 過程としての時間」の(注2) 日本総合愛育研究所紀要 第10集 1974

- 注2 小園 由美子 保育において生きられる時間
お茶の水女子大学大学院家政学研究所児童学修士論文 1981
- 注3 ①中島 尚志 道元 無師独悟の季節『正法眼蔵』一現成公案 (自己をはこびて万法を修証するを迷とす、万法すすみて自己を修証するは、さとりなり)三一書房 1973 P 103
② 富山 はつ江 禪とカウンセリング カウンセリング vol. 14-1 No.55 P 7~12 全日本カウンセリング協議会出版 1981.6
③ パブワン・シュリ・ラジネーシ 究極の旅一禪の十牛図を語る めまくまーる社 1978.3
- 注4 ①倉橋 惣三 育ての心(上)(自ら育つものを育てようとする心)フレーベル新書12 1978.10
② E. H. エリクソン 幼児期と社会 I—玩具と理性 P 275~みすず書房 1977
③ カール・ロジャース 人間論 ロジャース全集第12巻(人間は「自ら学ぶ能力」と潜在的に「成長する力」をもっている) 岩崎学術出版 1967
④ Gendlin E. T. Focusing Ability in Psychotherapy, Personality and Creativity (In "focusing" one shifts "from the inside out but not from the outside in from oneself) In Shlien J. M. (Ed) Research in Psychotherapy vol. III Wasington; America Psychological Association. 1968
- 注5 秋山さと子、子どもの深層—内なる生命力 P 14~39 海鳴社 1978. 12
- 注6 メリイ、M. グルーディング、ロバート・L. グルーディング 自己実現への再決断—T.A. ゲシュタルト療法入門 第二章T.Aの概観 P 15~72 第六章感情 P 212~ 350 星和書店 1980. 11
- 注7 ①秋山 さと子 箱庭療法 P 10~17 日本総合教育研究会 1978
②津守 真 保育の体験と思索 P 92~94, P 155 大日本図書 1980.12
③C. G ユング 人間と象徴(下) P 129~170 河出書房新社1975
④G. H リュケ 子どもの絵 P 65~118 金子書房 1979
- 注8 M. —L フォン・フランツ メルヘンと女性心理 P 79—106 海鳴社 1981
- 注9 秋山 さと子 箱庭療法 P 29 日本総合教育研究会 1978
- 注10 津守 真 保育の体験と思索—受けとる P 103とP 139~140 大日本図書、1980.12